

アクティブシニア・利用者さんとともに・・・

—重度の認知症者への傾聴ボランティア—

○鈴木好子（シニア学びと活性化プロジェクト会員、さざんかの会会員）

多田哲雄（シニア学びと活性化プロジェクト副委員長、占部慎一（研究委員会委員長）

重度の認知症者の様相は様々である。身体中治療の管に繋がれ瞬きしかできない方、施設の誰とも口をきかず日々黙したままの生活を送っている方など、傾聴の手掛かりがない方が大半である。当然、アプローチや方法にモデルが存在するわけではなく、小さな瞬きやちょっとした仕草など利用者さんの発する暗黙のメッセージを温かく受け入れ、当事者性を感じ取り、吟味し、暗黙知（M. ポラーニ 2003）と形式知を総動員して利用者さんに合うメッセージを穏やかに返していく。このゆっくりとした営為の繰り返しと継続である。しかし、彼らの瞳が初めて潤う時、初めて筆者の手に触れて微笑まれる時、人の存在の尊さと豊かさに胸が熱くなり光を感じる日々である・・・。

○重度の認知症 ○傾聴ボランティア ○様々な人生 ○分かち合い

1. プロフィール

1930年生まれ 89歳

華道（池坊 草月流）、懐石料理、中華料理、ケーキなどを自宅にて指導。

55歳の時、突然、夫（60歳）が脳幹出血で倒れ植物人間となり、3年5ヶ月間入院生活。心配と不安に苛まれる日々。筆者は、2度神経症に陥った。しかし、ほとんど毎日お見舞いに来ていただいた会社の方々、友人、知人、親戚の方々のおかげで。彼らの温かい微笑と励ましと癒しに、私達夫婦がどんなに勇気づけられポジティブになれたか分からない。

2. 傾聴ボランティア活動

夫の死後 2年の間、考える能力、体力もなく、またノイローゼになった。しかし、友人、子どもの言葉に支えられ元気になることができた。そこで、「夫の闘病中得た感謝を今度は社会に恩返ししたい」と思ったのが傾聴ボランティアであった。夫は3年5か月の間植物人間であり、この経験を生かそうと思った。もう一つの救いがバウンドテニスであった。現在も続けている。

12年間の傾聴で 250名以上の重度の利用者と接し現在に至る。奉仕先は浴風園である。

(1) 浴風園施設概要

浴風園全体で650名余りの利用者がいる。

筆者は、第二南陽園の150余名を担当する。総合病院を持ち東京都の傾聴本部がある。教授や多数の先生方が携わっている。浴風園は皇室の御下賜金と一般義援金が設立資金とし内務大臣の許可を受けて財団法人として設立。

(2) 認知症者の現状

浴風園は、介護支援3級以上が利用。

女性特有の井戸端会議は不可。

車椅子の利用者がほとんどである。

歩行器の利用者は現状では見かけない、

他はベッドに寝たまま鼻漏である。

3. 事例

(1) 85歳 女性 Yさん

かつては会話が出来ていた。しかし、11年間の傾聴の間に鼻漏になり、会話は途絶え、瞬きだけが意思表示を示す唯一のサインとなってしまった。表情を失い、普段は目を閉じていることが多い（無言の方との傾聴は大変である）。

筆者は傾聴の時、昔聞いていた息子さんやご姉妹など身内の方の話をすることが多い。以前話を聞くと、彼女の眼が潤む。失いかけている人としての情感を引き止め涙で表出していると思われた。その奥には、すでに断片となって記憶から去ろうとしている物語が存在しているに違いない。人は誰も物語に囲まれ情感豊かに生きたい存在であり、そのこと自体が生きる意味（V.E. フランクル 1993）でもある。それは脳幹出血で言葉を失った夫の看病から学んだことである。

Yさんに一日でも長く生きてほしい、少しでも楽しさや思い出の情感を味わえるようにと思いい、最後まで傾聴に出かけるつもりである・・・。

(2) 87歳 女性 Kさん

品性が漂う美人。しかし、誰とも会話をしない。会話が嫌いというわけでも対人恐怖に陥っているわけでもない。認知症が進み、会話をし

たり楽しんだり、他者とのコミュニケーションを通して社会生活を営もうとする脳の働きが退化し始めているのである。会話を復活させ少しでも脳の退化を遅らせることが必要であった。それは、「彼女の命の消失を遅らせることにも繋がっているのではないか」とも思われた。

感動

必要性を感じていない人に、必要性を悟らせることほど難しいことはない。

会話を復活させる方法は容易に見つからなかった。ある日、長く続けているバウンドテニスからの帰り道、人波の中を歩きながら私は、ふと、ある映画のシーンを思い出した。それは夏の日、五重の障害を持ち荒れていた幼き日のヘレンケラーに手を出させ、サリバン先生が井戸の水をかけてあげるシーンである。夏の日差しの中で冷たく気持ちよい水の感触に驚き、ヘレンは「!？」ともう一度手を差し出す。サリバン先生は水をかけた後手を開かせ、掌に「W. A. T. E. R.」と書く。ヘレンが初めて文字の存在を知ったあの有名なシーンである。

「Kさんが感動するものはないか」そう考えながら浴風園に行った日「素敵なのが目に入った。庭園に紅葉の花が咲いていたのである。「紅葉の紅葉を知っているも、きれいな花は知っている人が少ない。品性ある美人のKさんならば、きっと気に入ってくれるに違いない。」

紅葉の花



左図の小枝を彼女に差し出すと、彼女は今までの沈黙が嘘のように「きれいね」と言う。

「あなたもお花が好きなの」と自然な感じで会話始めた。以後いろんな会話ができて、私が来るのを笑って待っているようになった。

しかし、彼女は間もなく腰椎を骨折し寝たきりになった。

原風景—故郷、父

このため寝室にて特別傾聴を7年間続けた。行動をしなくなると認知症は悪化してしまう。

行動をしなくなると認知症は悪化してしまう。そのため、より深部から、換言するならば存在の淵から会話はできないだろうかと考え心の奥底に懐かしい原風景として大切にしまっている故郷について訊ねてみた。残念なことに全て忘れている言葉だけは憶えていた。

れていた。しかし不思議にも「朝鮮の木浦」と

次回、私はネットの木浦の風景数枚と木浦の印刷物を数枚持参した。すると、木浦と書いてある印刷物だけを10分以上眺める。風景写真には興味示さない。現代の風景は80年前の風景とは違う。変化を考えると無理もないことであった。しかし、「父がお巡りさんで、交番に行つて、石ころがあつてね」の3点を何百回と私に話し笑顔にもなった。幼いKさんが捉えた忘れがたい原風景、それがその3点だったに違いない。その後、彼女は3点の原風景とともに黄泉の国に旅立って行った・・・。

まとめ

重度の認知症者は、人生の辛かったことや失敗の痛み等はすでに忘れていくことが多い、脳と心の防衛機能の作用のためであろう。

このため、会話を忘れ、人との関係づくりを忘れていく彼らがそれらを取り戻すには、ネガティブな事柄ではなく、「懐かしく思い出せる事柄」や「喜ぶ個性や長所」を手掛かりとして関係をつくっていく必要がある。「百人百種」と人は様々である。このため、傾聴者は「人間好き」で受容的でなくてはならない。会話を復活は「生きるエネルギー」にも小さな明りを与えるように思える。

12年間の想い

特養ホームに重度の認知症の方の傾聴者はいない。当然、ケースデータは皆無であり、常に暗中模索状態である。例えば、sさんは目が見えず重度の難聴であったため、ハグがご挨拶であり、そのハグの感触で人の良し悪しが分かるという、誰とも会話しなかったkさんは別れ際に必ず「忘れないでね」と言う。事例で取り上げたYさんは瞬きで想いを告げてくれる。

人は誰も幾つになっても、たとえ様々な記憶が失われても、人に理解され承認され愛されることを欲する存在なのである(A. マズロー1987)。

これは人間が持つ基本的欲求なのである。また自己とは、S. キルケゴール(1957)が述べるように「関係の関係である」存在なのである。決して、孤立無援の状態でも定在を保っている存在ではないのである。私は12年間一度も「傾聴を辞めよう」と思ったことや「休んだこと」もない。彼らとの関係で、私も満たされているのである。これからもアクティブシニアとして傾聴を続けていく所存である。